



三眼遺聞

全

洋学文庫
文庫8
D 362



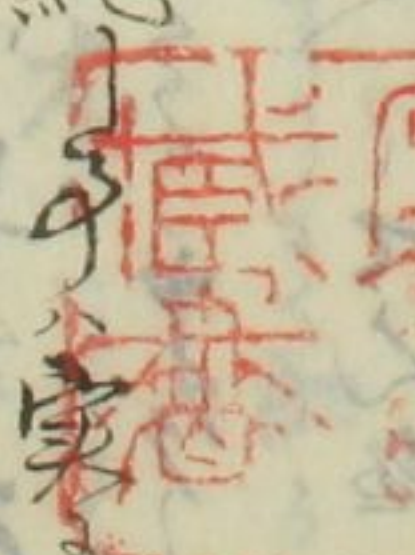
文庫8
D 362



三眼遺聞

寛永島原之役邪教之徒を殄滅し長し禍根を絶つべし
 天下後世の福なり其子汝外に傳日本三眼の名を致す
 一六頁関係大なり是役の祀我頗多し今所觀し諸事
 就了事の世戒に傳ふべきを輯め有志の志を以て考ふる
 一七頁一三眼遺聞といふ但諸言を抄出して統記する
 時に見る解し難き故に其内を島原の記として一言を取ら
 全文を掲げ依言して抄する處は其後依言して島原の記
 異に島原の記の事載する事と邪教の子守の島原の記の事
 且島原の記の當時の事載する事と文言の抄は其の事
 多かる事とある事と島原の記の事と固く當時盲俗の記
 八行抄かすもの是なり固く當時盲俗の記する事と名

中井氏珍蔵



010190617926

41 7839

村へ廻りし水村に在りて四人とも討たぬ又三宅次郎左衛門牧田長
兵衛はのほあつたの在りしをさうしついで百姓方を向
りて念の次才より宗行を水邊にまき出せしむるが
十月下りの年の刻斗と雨の十刻まであひの合戦島原武者か
けまけ二十餘騎をなせり方、城にこころしき一揆を島原を
とらむるをせん、川右各島原、川中ありてつけいし、仕島原
町へ火をあげし、焼掛大もの、押寄候、また入城内
もつけあひしむき、戦い申之百姓共あけまけ一揆六十餘人、
あしむる仕をせり、百姓も我村をこころしめり、
町人共あつたむるたむ子の討斗をさうしついで、
町人共あつたむるたむ子の討斗をさうしついで、

除地すなり、
鍋島信濃さへも、
後之る米さへも、
津島之豊後の事、
は由臣をさうし

一書曰大坂落得の翌年、
お願うる島原に討て、
お民を食飲を極し、
節益回四節、
初め也元、

上
下
中
下

心打節有江村の佐志本作在る云者... 隠玉の... 目... 退... 作... 生... 了... 我... 警... 東大...

土着の制止... 代... 年... 日... 万... 第...

繁多願不... 怒... 隣... 代... 同... 同... 方... 家... 中... 樹... 共... 我...

凡福乱の致す所
凡福乱の致す所
凡福乱の致す所
凡福乱の致す所

小差及美哉之入打移之信方
小差及美哉之入打移之信方
小差及美哉之入打移之信方
小差及美哉之入打移之信方

又曰右三人は月付良同年
又曰右三人は月付良同年
又曰右三人は月付良同年
又曰右三人は月付良同年

又曰近山は出入敷
又曰近山は出入敷
又曰近山は出入敷
又曰近山は出入敷

凡福乱の致す所
凡福乱の致す所
凡福乱の致す所
凡福乱の致す所

又一方曰島原天草
又一方曰島原天草
又一方曰島原天草
又一方曰島原天草

高橋家の風情
好人のことと然れ
りて大年のまゝ夫
の戦場の好人の心
をさす

押ありの色も一換の出立も白き本物の宝物をさし玉なまき
と云先大さくたる様ゆくりをりて新巻を仕敷るゝるまき
と云先者の者もハ多る左に松を折を押ある道付たふあま
きん若狭の情も首のうけ可脱目らんやあつてをさす
強能とこそ打りたる故守のたね末終り勅のまもり
頼義の又つらる川割希ゆたる女房中なるハ色も味方の
号外の食さるるたる豆の粉を搦搦食を仕用三山
と云田代右衛門川副茂たる可外侍共の女房共た
中下女共もや付手豆の粉を搦搦食をいりて小く一口
ゆりて搦たの豆粉もいりて箱の物も入水空相をむき袂

入下女も折自身も折本丸中へ行ける竹中もや及る下
道中も明し梅石も密相も口より打込通りりて長物長く
と云恵まると福を短く切捨男もあつて勸りたる落城
と云人平もいりて心算も存せられし男も氣を付
りて又呼子平右衛門の女房の富屋の五里脇楠浦の中
居りりる。卒んたる善徳も多富屋もあつてあつての
もまらりて平を夫平たる常々心算も男とあつて付死仕
りたる年もたつと善徳もケ折の女童も一節と云のゆり
中のも若き海心涼波いりてあつて流絶百挺程有けま
中十五間六間を打込とあつて夫もいりて志岐もいりて
是を見

戸の種々の物に在りて、此の如く有るもの多し。

又曰、換原博と云ふは、月朝の事、無情の事、古の由、此の
桐花社、成る、東西の二方、海岸、屏風を、立、て、て、
形、を、て、あ、れ、を、て、南、北、の、二、方、を、さ、す、下、の、海、面、一、換、先、花
博、の、事、分、を、一、層、の、波、人、を、立、て、無、情、有、り、南、人、三、六、叶、中、の、所、
道、具、を、持、ち、お、廻、り、あ、た、の、火、を、消、散、す、救、廻、の、事、也、南、人、状
と、入、記、の、事、也、此、の、所、を、戒、む、事、也、其、傍、二、百、三、十、余、の、見、到、を
以、て、換、す、事、也、由、是、一、万、余、物、傍、三、万、余、桐、花、の、博、に、
天、字、也、と、名、を、付、三、字、の、名、を、受、て、換、す、天、字、四、字、の、若、う、
き、り、し、丹、の、事、也、一、つ、と、若、事、也、と、し、て、一、定、の、事、也、

宛智謀人の越たり、其外隣山の名も、吉利支丹地集、花博、
も先大手博と云ふ、と、と、通、の、山、廣、田、の、桐、花、を、名、也、
と、云、切、ま、長、く、ま、又、ま、ま、し、一、層、相、出、三、尺、有、り、中、に、換、の、事、也、
尺、有、り、し、の、村、の、大、外、を、名、を、あ、り、し、り、入、め、の、事、也、
此、石、大、夫、と、道、を、さ、す、事、也、博、の、事、也、此、の、事、也、
手、の、事、也、此、の、事、也、相、白、き、布、を、五、百、六、百、一、万、有、り、
と、云、一、年、の、事、也、と、云、一、年、の、事、也、物、を、と、一、万、有、り、
切、り、換、す、事、也、此、の、事、也、換、の、事、也、
博、の、事、也、此、の、事、也、一、万、有、り、
四、百、有、り、一、本、有、り、と、云、或、の、事、也、換、の、事、也、

也攻口之足場惡く寄手多勢之進退不自由也非平場軍故
武士農人之無勝劣歴々之勇士為鉄炮大勢無下討死不信
敵之獲兵方多也網網廻思案籠城人數三万七千余人此城之結構也兵糧不
多及飢一兩月不越又謀反人蓋城也急可攻是天帝宗而已
也然火急攻城軍兵大勢討事思慮短处也上意之趣毛亦然
諸大將之陣軍付身場栖樓以大鉄炮可被討云皆曰上意
之上奉畏面之敵陣所各攻口二重三重振柵築山栖樓竹束置
楯持楯衛寄、城近付仕寄合打大鉄炮又伊豆守下知自
長崎大船四五艘召寄阿蘭陀人令打大石火細川黒田淳五十
奈艘之番船於海上大石火大鉄炮如打入依于堀門矢倉被打破

無修覆之晦於是城中死者多城兵數千軒之陣屋共悉堀地如土藏
拵土堀之藝居ス

山田右衛門作ト云者彼才覚勝人博學嗜諸道弁舌利
矣之者之故郷民之棟梁也本九持口被逐其隨八百余人之大將也
山田熟業ニ乍在吾扶桑之地相背國王之主命不知異國之夷之
為ニ捨命欲滅吾國之条相背天理人望均畜類争力可逃天罰吾
尊所之本尊號天帝ト云是天性也背天性者豈為成佛大
惑改過勿憚ハ聖人之教也早属武家勵忠烈思吾手之農人
八百人時之論此理皆尤ト飯伏ス仍テ孟春下旬認一翰有馬左衛
門佐陣中ニ射矢文云被責當城吾兵八百余人真似防戦而放火

又曰城中山田右衛門作ト云者彼才覚勝人博學嗜諸道弁舌利
矣之者之故郷民之棟梁也本九持口被逐其隨八百余人之大將也
山田熟業ニ乍在吾扶桑之地相背國王之主命不知異國之夷之
為ニ捨命欲滅吾國之条相背天理人望均畜類争力可逃天罰吾
尊所之本尊號天帝ト云是天性也背天性者豈為成佛大
惑改過勿憚ハ聖人之教也早属武家勵忠烈思吾手之農人
八百人時之論此理皆尤ト飯伏ス仍テ孟春下旬認一翰有馬左衛
門佐陣中ニ射矢文云被責當城吾兵八百余人真似防戦而放火

城中之諸營其後鄉民等可參柳陣但其駐在于四郎之居陣可落
卜稱取乘小船輒生捕四郎欲勵忠節故思慮小舟少故用
意之云此者城中隨一之民首也偽別寄味方可成計者不及返答
山田重武家深志之意趣不偽之音表返諸社牛王則日本之風
俗之誓詞且南蠻耶蘇宗所用之誓認兩通射矢文此上無子細
定城攻之日射矢文于山田陣山田不知之夜廻之者此矢文之
拾令見四郎時貞大驚山田以下輩思一向之耶蘇為一方防
然斯企逆意罪科甚不輕然依天帝之真加今忽露顯申
搦捕山田則捕其妻子一族皆座殺害其後召出山田四郎尋
子細川山田堅陣不知四郎聞其理卒尔不可殺卜拵詰籠入

置八百余人ヲ入宛召出既ニ山田自狀也下逆意之事穿鑿又兼テ堅
ヲ契約シケン誓山田ハ自狀スル氏吾々ハ夢ニ不知ト一様ニ申ス八百余
人之内何シテ一人詰問スヘキヤウナリ其終見テ圖ノ
島原記曰原陣ヲ矢文細川越中ニシテ射矢ノ字左段為シ左段
陣ニ若シ字左段有テ拵テシテ新井甘原ノ左利支丹ノ字左段
有テ若シ左段別字ノ有テシテ不事ノ字左段破物位
天下稱難シ及シ法度ニ信付居建然仕然中後生方中難進
存テ信テ易字有テハ紅明洞刻非人ノ作法或既加
厚或極意迫テ為居兼天幸極貴教平其外志ハ心ハ悟
者乃及何貴也收押不度難度隨ハ意改宗洞ハ物心也

作らば大坂より大野の陸軍又之國の他の時運金我れ自功之者
を伴ひて居りてふ事内成るるも午らるる後合人形を不身之
とて千五百圓分を以て金貨を造ると云ふ所を以て内は我れは下
りて然る事にはけりてお定はるる此大名の信をうけ陸軍
の由に我れは下つた大野車軸を流すに付掛合方走下りて低き水運
又同隊を以て一揆去十月より年を以て罷罷を以て棄てて之
るれら友は非依り一揆を打た該を以ていふ事の内隊に罷罷
了りて我れは下りて之れ棄てんとす所を以て信を以てしりて
我れは打たふ事 苟合物も有る故隊を以て後を以てしりて
その事大なる事とす所を以て之れ棄てつとす所を以て時方討とす

因東に於て京師の只此の云せざるに二百五十の秋陽高陸突之者
併隊を以て自ら以て一ツ先年より二ツとす所を以て 大野有は
一ツ二の目二つとす所を以て 始は 大野日如に非非は古くも
之を以て但陽高手一ツ先年より二ツの内二千人隊を以て
かけ或は馬を以て教へて教へて人々を以て自ら以て之れを
爰がす所を以て之れを以て之れを以て之れを以て之れを以て
兼て捕らふ事も有る所を以て之れを以て之れを以て之れを以て
一ツ二の目二つとす所を以て 一ツ或は人々を以て之れを以て
陸軍の隊を以て之れを以て之れを以て之れを以て之れを以て
之れを以て之れを以て之れを以て之れを以て之れを以て之れを以て

少シ源外鎗長刀以防之日已暮不落本丸同廿八日未明諸手一同
作時都合十二万余諸大將吾一番ニ棄取シ本丸火急攻之一換之輩
限命思定鉄炮如雨打出如稀麻中ニ打込五一ッ矢一筋三人三人被
打倒無淨矢附堀大石大木打落棄堀鎗長刀或ハ鈍鎌附柄捨落
擲落寄手軍勢目前ニ討ルヲ不顧嶮キ坂ノ石壁ヲ匍上レハ打落
打落セハ匍上レ死骸筋力上ニ重リ置ケタリ一換等ハ今日ニ亦苦勞ニ大
ク付投堀下寄手欲除極火後陣之大勢不前難混押ニ押難燒爛漂
所ヲ自懐中投木石如石壓即致死者不知數寄手皆志死難攻石
難攻石壁巍々トシテ可登便ナシ唯徒々懐ヲ白眼心力疲於是寄手數
千人被討去氏數万軍士一心ニ新守ヲ入替ニ攻入一換以捨突取付其

鎗以木刀斬レハ廻付其木刀無体ニ攻入又火矢數百本射入城中大將四郎力
陣屋火矢燃付打節演風烈敷數万斬之陣屋黒烟覆天諸手軍兵
競此火喚叫攻戦自四角八方衆入揚勝則一換之如原突捨切捨攻戦一
換之者星老若男女願死難相戦食ニ餓ニ遠矢之勝負ニ事替リ鎗ヲ
合木刀ノ勝負日來不守則棄ナレハ幸カ武士ニ可叶皆圖ト被討女
房童部飛入猛火之中燒死新不腊命有様鷲目大將四郎時真
細川景討取之二月廿八日之午刻吉利支丹悉滅亡死骸星々トシテ
如山流血混々トシテ如河其内山田右衛門作石貝江戸為信綱家入
三萬七千余人之内山田一人追死
一書曰源外鎗長刀以防之日已暮不落本丸同廿八日未明諸手一同

過塞坐氏無幾程何_二被免許_一職大名今度面_一及粉骨陪臣若干
牛負死人有之肯不使_二被思食候_一保之早速之功御機嫌不斜緩
卜致休息參觀之砌街道_二可被仰附之_一旨演說諸大名皆御聽
之上意難有奉存之由御請申上皆敵國此年十二月五日松倉
長門守切服被仰付日頃杜置思教百姓及雜義不得已企一揆之
段西國之御目附衆委細達上聞之間様子被遂御食談及此儀

慶應三丁卯八月六日寫終

安食茂典 年六十四

勝保氏心書

